『パラダイス・ロースト』における「罪」と「死」の動きとそのインパクト

――アダムの責任の覚醒――

室田五郎

はじめに

Paradise Lost 十一巻においてアダムはミカエルによって未来の子孫のこうむる苦しみと死を映す幻を直視することを強いられる。その幻は世界が罪と死によって征服されていくことを示しているが、それはサタンが全人類を支配することを意味する。このことは創世記の記事が示すように、アダムとエバがへびにだまされて神のいましめを破ったことの結果としておこったのであることをミカエルはアダムに納得させようとする。そしてその重大さを正しく伝えるためにミカエルはアダムに見るに耐え難い幻を見せるのである。

ミルトンはその伝えるべきことの重大さのために視覚の果たす教育的効果の必要をここに強調し、それによって子孫に対するアダムの責任の自覚の成長を促すことがふさわしいと考えたに違いない。その子孫が経験する悲惨さの背景にミルトンは「罪」と「死」という超自然的なリアリティとその動きを神意のあらわれとして用意したのである。

I

Joseph Addison (1672—1719) はミルトンの *Paradise Lost* について批評をかいたが、*Paradise Lost* 十巻の中の「罪」と「死」のアレゴリーについて次のように記している。

そのような人物が主要登場人物として導入され一連の冒険を行うとき、重荷がすぎて英雄詩として決してふさわしくない。英雄詩というものはその主要なる役割においてふさわしく映るはずのものである。それゆえ「罪」と「死」がこの種の作品には不当な人物であると思うとがまんがならぬのである。(1)

実は *Paradise Lost* において「罪」と「死」の登場は単なる短いエピソードとして簡単に無視できるものではなく、この詩の理解に欠かせない大きな部分をなしていることに注目すべきであろう。

なぜならば第一巻の冒頭の祈り (invocation) は次のことばではじまるからである。

人のはじめの不従順につき、又かの禁制の
木の実につき(歌え)、それその致死の味は
世界に死とわれらのすべての苦を来らせり (I 一—三)

すなわち、ミルトンは罪と死とを真正面にとり上げたのである。それだけではない。*Paradise Lost* が拠って立つところの聖書の中ですでに見えざる力のリアリティを示すものとして罪と死が提示されているので(2)、ミルトンが矢張り罪と死のリアリティを示すために伝統的な叙事詩をのりこえて(3)、天の事情ともいうべきものを提示しているのである。

ただしこのことはあくまでも知られざる部分としてアダムとエバにはかくされている。しかし読者には明かされている超自然的に不快なるリアリティといってよいであろう。

Ⅱ

サタンが地獄の門に来た（Ⅱ　六四五）ときに「罪」と「死」にはじめて出合った（Ⅱ　六四九）。このミステリーは地獄の内側のエピソードで、読者はいわば密室内の秘密の事件を目撃させられるのである。「罪」はサタンの頭から生まれたと自ら証言している。その証言によればサタンが天において御子にねたみをいだいた（Ⅴ　六五七以降）ときに生れたのである（Ⅱ　七四七―六〇）。更にサタンと「罪」の相姦により「罪」は「死」を孕る（Ⅱ　七六六）。天の戦いはその後におこったのである（Ⅱ　七六七―八）。この両者はおそろしく醜悪な存在である（Ⅱ　六四八―八〇）。

しかしサタンは相手が自分の身内とも知らずに叫ぶ。

汝呪わしき者いずこより来るか、何者か
みにくく不快なるに、なお厚かましくも
汝の奇怪な面をつき出しわが道をはばむか
彼処の門に至る道を、われ門を通らん
決意は固し、汝のゆるしは請わず、
さがるべし、さなくば愚かさを思いしれ
「地獄生れ」よ、天の霊と太刀打敵わぬことを
（Ⅱ　六八一―七）

これに対して「死」も負けじと応酬する。

汝はあの反逆天使か、汝こそが
まず天の平和と信頼を破りし者、それ迄は
無傷なりしに、しかも高慢なる逆軍を挙げ
天の使いの三分の一を引き連れたり
いと高き神に逆らう盟約の下に　故に汝も
彼らも神から落とされここに罰をうけ
とわに苦痛の日々を空しく過ごすならずや
然るに汝自らを天の霊と数えるか
「地獄落ち」よ、なおここに傲然とほざくか
ここはわれが王なり、更に汝を怒らせんか
汝の王にして主なりと、汝の懲罰に帰れ
不実なる逃亡者よ、速く走れ、とび失せよ
さなくばさそりのむちもてわれ追いたてん
汝のためらいを　さなくばこの矢の一撃で

怪しき恐怖や未験の痛苦が汝を襲わん。

（Ⅱ　六八九―七〇三）

何故にミルトンはこの両者を互いに相対立するように描くのか。サタンも「死」も互いに身内であることがわからなかったということを考慮しても「死」の言い放つことばは難解である。「死」は善天使の如きものなのか。「死」の語ることばはアブディエルのことば（Ⅴ　八七七―九五）にも比べられるではないか。

更に不可解なのは「罪」の語ることばである。

この地獄の奈落の鍵を当然の権利により
又天の全能なる王の命令により
われは持つ、されど彼の固き禁令により
この金鋼扉開けられぬ、すべての力に抗し
「死」は彼の矢を放たんとて構え立つなり
生ける力に敵わぬことあらんとも恐れずに

（Ⅱ　八五〇―五）

なぜ「罪」が地獄の門の鍵をもつのか。しかし「罪」は更に言う。

されどわれ天よりの彼の命令に何を負うか
彼はわれを憎む、故にわれを押しこめたり
ここに深きタルタロスの闇の中へと
故にここで憎むべき役にされて坐るなり
天の住民にして又天に生れしに
ここにて果てぬ苦悩と苦痛の中に
数々の恐怖や又わが生みし子らの怒号に
囲まれる、その子らはわが腹を喰らう。

（Ⅱ　八五六―六三）

サタンが罪を犯したことは神のにくむところであり、神自身がその罪のしるしをサタン自身から生ぜしめたのが「罪」であり、その「罪」をしてサタンを地獄にとじこめる門守りたらしめたのであり、それ故に「罪」がサタンを地獄から脱出するのを阻止する力となっているというようにミルトンの意図をよむことができよう。

それ故罪を犯したのはサタンであるが、その罪のしるしの「罪」をサタンから生ぜしめたのは神自身であり、サタ

ンに向かって「罪」が神からの命令で門守りをしていると明言する理由は「罪」がサタンに良心（Ⅱ　二三）から来る苦しみを与え（Ⅳ　一八―二六）、神の存在を思いおこさせる働きをしているのだと読者が理解することは可能であろう。[4] とにかく「罪」が地獄の門守りであるということは、サタンが「罪」により地獄にとじこめられていることを意味するとみてよいであろう。

「死」は「罪」の命令に従わないところの何者に対しても抹殺する役目をもっている（Ⅱ　七〇一―三）。それがサタンを面罵するのは、神から地獄のサタン及びその部下たちを封じこめるべく命令をうけているからである。本来ならばサタンは「死」によって直ちに抹殺されても道理だが、「罪」がサタンを父とよび「罪」と「死」がサタンの身内であることを急いで明かすことによって、それは辛うじて回避されたのである（Ⅱ　七四七―八一四）。ここで「罪」と「死」及びサタンの敵対関係が解け、サタンは地獄脱出の為に一歩前進することができたのである。

「罪」が神から憎まれているという不満を抱いていることをサタンは知る。又「死」がその飢えた胃袋を充たす機会が与えられていないことに不満を抱いていることをサタンは知る。その両者の不満を察して、サタンは今これから行おうとする冒険の目的を語って、近ごろ新しく創られたと噂にきく人間の住む世界に行き、その噂が本当ならば「罪」と「死」がそこに住みつくようにつれていくと約束して言う。

汝らを彼処に連れ、そこにて汝と「死」は
安らかに住み、高く低く姿かくして
静かに豊かな大気を翔び、香気に
包まれん、彼処にて汝ら満ち足りること
いくばかりか、すべて汝らの餌とならん
（Ⅱ　八四〇―三）

このサタンのことばにすっかりよろこんだ「罪」はサタンの頼みをきき入れて地獄の門の鍵をあけてしまうのである。このようにサタンは「罪」と「死」の父であるという素性が明らかとなって「死」という必殺の敵に悩まずにすむことになり、それどころか「罪」と「死」を敵から味方に変質させ、しかも、やがて神に復しゅうする自分の企てに加わらせるのである。サタンはかくして「罪」の束縛と

「死」の脅しとを回避して見事に地獄という牢獄を独りで脱出に成功するのである。

Ⅲ

さてサタンは地獄を脱出して大困難に遭遇する。即ちカオス（混沌の領域）を通りぬけなければならぬからである。それは上下左右全くわからぬ熱風逆巻く世界なのである。そこにカオス王が支配している。カオス王は秩序の敵である。だがこれもサタンの味方ではない筈である。「カオス」（カオス王）は暗黒を司る「夜」と共にサタンを迎える。サタンは彼らに初対面の注意深いあいさつを送る。

汝ら力ある者ら
にしてこのいと深淵なる奈落の霊ら
「カオス」と老「夜」よ、われ決して
冒険の目的で覗きに来しに非ず、まして
汝らの国の秘密を乱す目的なし、止むなく
この暗き広野をさまようのみ、わが道は
光に到るまで汝らの広き国土を通るゆえに
独り案内もなく半ば行きくれてわれ訊ねん
どの近道をいけば汝らのくらき国境が
天国に接するか、或いはもしある他の地を
汝の領土から奪って天国の王が
さいきん手中に収めしなら、彼処に到る為
われこの深き地を旅するなり、案内せよ、
案内あらば決してけちな報いとはならぬ
汝の益の為、もしかの失せし地域をわれが
すべての簒奪をそこから追払ってもと通り
はじめのやみに返し汝らの支配に復帰させ
（これこそわが目下の旅の目的）又再び
老「夜」の旗印をそこにたてるならば、
全利益は汝らに、復しゅうはわれにあらん。
（Ⅱ　九六八―八七）

サタンのあいさつに対して「カオス」の返事は次のようである。

不案内の者よ、われ汝を誰か知る、
あの力ある第一級の天使なるにさいきん

天の王に逆らいて立ちしが落されしものよ
われに見え聞こえしはむべなり、かの大群
逃げしに静かならず、怯えし深所を貫き
破れに破れ、敗走に敗走をかさね
混乱は一そう悪化し、天国の門は、
幾百万の天国の勝ち誇れる軍団を追跡の為
注ぎ出せり。　（Ⅱ　九九〇―八）

以上のように「カオス」の応対は決してサタンに対して好意にみちてはいないが、サタンの注意深いあいさつと懇請によって露骨な敵意はなくその要請はきき入れられて、サタンは無事カオス領から宇宙へと進むことになるのである。

サタンのことばは「罪」と「死」にたいする場合とは大分調子がちがう。用意周到なことばのうらには、「カオス」も神の命令で混沌の世界を支配していることをサタンが知っていることが暗示されているようである。それゆえサタンは自らを「カオス」の敵でないことを示そうとして注意深くことばをえらんだといえるだろう。それにもかかわらず「カオス」はサタンの素性を明らかにして批判的な反応をしている。

だがこの一見して強い「カオス」の姿勢にもかかわらずサタンは鋭く「カオス」が神の支配に対して不満を抱いていることを嗅ぎとるのである。すなわち「カオス」はカオスの世界を支配しているが、そのカオスを用いて神は地獄を造り、又新しく宇宙を創造したのであって、それだけ「カオス」が支配できる領域をせばめたからである（Ⅱ一〇〇二―六）。

秩序の出現を嫌う「カオス」はサタンが新しい宇宙の出現を無きものにしてもと通りのカオスにしてやるとの約束を信じ希望を抱きサタンの頼みに応じて道案内をする。

サタンは今や着々と旅に進んできた。「カオス」の案内に従って聖なる光のみえるところにやってくる。ここから先は旅はらくになる。そこでサタンは天国の眺望をえる。

二巻の終りの方でミルトンはサタンがカオスの領域の長旅が今や最終段階に来ていることを描いているが、わざわざ筆を脱線させて言う。

されど人が堕ちし後すぐ、彼が過ぎたれば
不思議なる変化よ！「罪」と「死」は急ぎ

彼のふみし跡を追いて、かかる天意により
彼のあとに幅広く踏み固めたる道を敷きて
架けたり黒き奈落の上に、そのたぎる海は
素直に一つの橋を支え、その驚異の長さが
地獄から延びて到るはこのひ弱な世界の
最はての境、その橋を伝いて邪悪なる霊ら
やすやすと出入りして往き交い
救なき人を誘い或いは罰する、さなくば
神と善天使らは特別の恵みにより守るに
（Ⅱ　一〇二三―三三）[5]

この脱線の部分は実はミルトンが熱心に興奮をもって語るところであり、十巻及び十一巻を読んでからでないとよく理解できないところである。この突然の話題の転換こそはミルトンの興奮の大きさを示していると思われる。そしてこの部分は十巻と十一巻の背景となるところといってよいであろう。

そもそもサタンが「罪」も「死」も味方に引きこんで、地獄の門をあけさせて地獄を脱出した以上は「罪」も「死」も地獄の中では本来の役目を失ってしまったのである。なぜなら一度禁開の扉が開いてしまったら全く無意味になってしまったからであり、又「罪」も「死」もサタンの約束に利益を期待するものとなったからである（Ⅹ　三六五―七一）。

人間がサタンの誘惑にかかり罪を犯してまもなく、サタンが通りすぎると不思議な変化がおこった（Ⅱ　一〇二三―四）とミルトンがのべたその「不思議な変化」とは十巻に一そうくわしくのべられている。

一方かく地上にて罪が犯され、裁かれし前に
地獄の門の内側に「罪」と「死」が坐り
向い合いたるがその門の内とて今や
開け放たれ、そこより烈しき火焔荒れて
カオスの中に吹き入る。それ「罪」が開(あ)け
悪魔通りし故、「罪」は「死」に言う、
　息子よ、われら何故ここに坐りて互いに
空しく見るか、今に大父サタン首尾よく
外界に活躍しここよりよき住家をわれら
彼の子の為に与えんとするに。必ずや
彼は成功するべし。もし事故おこれば、

今以前に戻りし筈、復しゅう者らに
はげしく追われて。実にこの地獄ほど
罰又は彼らの復しゅうに適する所なき故に。
われ感ず、わがうちに新しき力湧き上り
翼生えいでてこの奈落をこえる大いなる国
が与えらるるを、いかなる力かわれを引く
或いは感応か或いは何か共通なる力が
はるかかなたからいと秘密なる方法にて
同類のひそかなる親和力と強力に
結びつけんとて。汝わが影よ
はなれずにわれと共に来たれ
「死」は「罪」からいかなる力も離しえぬ
されど帰り道の困難なきように
おそらくこのあたりで彼の帰りを妨げ
こえ難く又通り難くならぬよう、われら
冒険なる仕事を試みん、汝とわれの力に
なしうる限りに、一つの道を築かん為に
この海の上を地獄から新しき世界へと
そこにはサタンが今勝利をえて、地獄の
軍勢すべてにとり大勲功のしるしとなり
ここからの彼らの通行を容易にせん、
交通にも移動にも彼らの身分の導くままに、
ましてわれ迷う筈なし、この新しく感じ
られし引力と直感にかく強く引かれては。
　彼女に対しその痩影はすぐかく答えたり
行け、どこにても運命と強き気持が
導くままに、われおくれることなし、又
道を誤らず、汝先立てば、われ嗅ぐ
屍の臭いを又無数の餌を、又感知するは
生けるすべてのものの死の風味なり、
又われ汝が企てる仕事に対して乗らぬ
どころか、汝に同等の協力を与えん。
　かく言いて、よろこびて彼地上の
死への変化を嗅ぎたり　　（X　二二九―七三）

以上がⅡ　一〇二四の「不思議な変化」の具体的な内容にあたるものといえよう。この不思議な変化は「罪」と「死」がサタンの人間誘惑の成功によって自ら動き出したことを示し、人間の犯した神への容易なる不服従が容易ならざる腐敗と破壊をもたらすという無気味なリアリティを

もたらしつつあることを示すのに充分である。

注目すべきことは、このことがアダムとエバには全くかくされているのである。ミルトンは読者にそれを見せているが、このことはすべて神には見通されているのである。

この物語は神の摂理にかかわり、永遠の相にかかわるので、人間の次元のみで語るならば悲劇で終るような物語にも人間の限界を越える目が介入する。読者はこの視点を理解することが要求されているにちがいない。詩人が一巻において、

この偉大なる主題の高みにまで
永遠の摂理を擁護できるように
又人に神の道を正しいと証しできるように
（I　二四―六）

といっているのもこのことを意味しているのではなかろうか。

ミルトンは「罪」と「死」のアレゴリーによって神の目をかいま見せようとしている。さきに掲げた二巻の終りの方の脱線部分にも何気なく「かかる天意により」（such was the will of heaven II　一〇二五）という。この短いことばの中にもミルトンは深い問いを読者につきつけているといってよいであろう。

IV

サタンがエデンの園の人間に罪を犯させて目的を果たし帰途につき、いよいよ宇宙の外部に来てカオス領に再び入ろうとするが、そこで大きな橋を発見する。又「罪」と「死」に出合う（X　三四五―五一）。サタンはその橋を見ておどろく。「罪」は言う。

おお親よ、これらは汝の壮大なるわざ、
汝の勝利の章（しるし）にして汝は己が事と見ぬが
汝こそ自ら作り又主たる設計者なり
それわれ心に直ちに推し測りたり、
わが心は、神秘の調和により
つねに汝と共に快い関係の中に動く故に、
即ち汝は地上にて目的を果せりと、汝の顔
も今明らかにするが、直接われ感じたり

汝から数多(あまた)世界の隔てあれど感じたり
われこの息子と汝を追うべしとこそ
かかる運命的成り行きがわれら三者を結ぶ。
地獄はもはやわれらをその境に閉めおけず
又このくらき渡りがたき海も汝の
輝く足跡を追うことを妨げること能わず。

（X　三五四―六七）

サタンは「罪」と「死」と共に深く結びつき、その二者によって心が通じ合っていることを知り、地獄から宇宙まで直接に通じる橋を知りよろこぶ。更に「罪」と「死」をはげまして言う。

それ故われ
汝らの道により暗黒をやすやすと降りん
わが盟友のつわものらへ、この成功を
伝え、彼らとよろこびを頒(わか)たんとて、他方
汝ら二人は此方へ、汝らの物なる多数の
星を通り真直ぐパラダイスに降りて行け
そこに住み幸いのうちに支配せよ、次に地
にも空中にも支配権を行使せよ。
特に地上すべての王と宣せられる人の上に
人をこそまず汝らの奴隷となし終りに殺せ。
わが名代として汝らを送る。又汝らを
全権に仕立てて地におかん、比ぶる者なき
力はわれより出ずる。汝らの結ぶ力の上に
この新しき王国のわが支配すべてが立つ、
そはわが業(わざ)この国を罪から死へ染めゆく故。
汝らの協力が成功せば、地獄のことがらは
損失をおそるる要全くなし。行け、強かれ。

（X　三九三―四〇九）

そもそも「罪」と「死」ははじめからサタンの分身であり、サタンをはなれて為しうる事業をもたないらしい。「罪」と「死」の働きはこの二者による次の会話に示されている。「死」は言う、

われは永遠の空腹をいだいてなやむ故
同じことよ、地獄もパラダイスも天国も、
最も多く戦利に合うところこそ最もよし

戦利はここで多くあるとも余りに少なくて
この腹この骨と皮なる屍体を充たしえず。
（X　五九七―六〇一）

「罪」は言う。

――われ人類を通して人の中に住みつき
人の思い、姿、言葉、行為みな毒に染ませ
汝の最後のいとうまき餌に味付けせん。
（X　六〇七―九）

サタンの視点からすると「罪」と「死」のはたらきは神への復しゅうの大きな勝利として考えられるが、神はこれらすべてを見通している。ミルトンは神が天使たちに語ることばとして次のように記す。

これらの地獄の犬たちがいかに熱心に進み
あの世界を荒らし尽さんとしているか見よ
われそれを美しくよく創りつねにそのまま
保ちたりしに、ただ人の愚かさがかかる
破壊の悪霊を入れこまざりしなら。彼らも
地獄の王も配下たちもわれを愚かと
きめつけて、又更にいともやすく
われが彼らをかくも天国の如き所に入らせ
又所有させ見ぬふりをしてまるで
わが唾棄すべき敵を喜ばせりと考えるなり
その敵は笑う、まるで怒りにわれを忘れて
われがすべてを彼らに投出したかのごとく
無造作にも彼らの悪しき支配に任せたりと。
されど知らず、われ彼らをそこに呼びしを
地獄の犬らを滓と穢物をなめ尽させん為に、
人の腐敗もて退廃させる罪が無垢なりし物
の上に及ぼしたれば。
（X　六一六―三二）

神はただ単に「罪」と「死」の動きを見通しただけではない。それらを神が人の罪への罰を熟させるものとして用いる。しかも「罪」と「死」は神のはじめの命令とは全く反対のはたらきに従事しているのである。

創世記三・一七は「地はあなたのために呪われ」ていることを記している。ミルトンはこの呪いを熱心に語る（X

六六九—七〇)。サタンが人間を誘惑しようとしてへびを利用する決意をするが、思わずサタンが吐露した大地への讃歌の中にミルトンが想像したはじめの荘厳な宇宙(Ⅸ 一五二)とけがれなき自然を読むことができる。しかしミルトンはアダムとエバの罪ののちの大地の傷みを記す(Ⅸ 七八二—三、Ⅸ 一〇〇〇—四)。そのあとに自然の異象が記される[6](Ⅹ 六四九—七一五)。

これは直接にアダムとエバへの呪詛であるが、又彼らの子孫への呪詛となりつづけることになる。そのことの予想がアダムとエバを惨めにさせ、責任を痛感させるに至るのである。

ああ良心よ! いかなる恐怖の奈落に
汝はわれを追いこみしか、そこから
ぬけ道はなく、深みから深みへとおちる!
(Ⅹ 八四二—四)

Ⅴ

創世記のエデン物語に従ってアダムとエバがエデンの園を追われることになる。ミルトンは *Paradise Lost* 十一巻においてこの追放の場面を描いている。天使ミカエルは天国よりつかわされてアダムとエバに追放の命令を告げる。エバはエデンをはなれることをいたく悲しむ。ミカエルはきびしくしかし慰めをもってエバをはげます(Ⅺ 二八六—九二)。アダムはじっとこらえてミカエルに従う決意を語るが、エデンを追放されることは、神と全き断絶を意味することになることを最大におそれる。そしてそのことを告白する。

それに対してミカエルは神がどこに行っても世界の神であることを信じさせようとする。なぜなら神がそのようにミカエルに命じたからである(Ⅺ 一〇四—一八)。そうして神が歴史を支配すること及び歴史に何がおこるかを示そうとするのである。しかしそれを示すことは決して生易しいことではなくアダムとエバに対する責任の告発をすることに等しいことなのである。ミカエルは語りはじめる。

……汝が信じうるよう、又確信してのち、
ここを去りえん為、われ遣わされたりと知れ、
即ち汝に示さん、未来の世に汝の上に又、

汝の末におこることを、善き事も悪しき事
も共に聞くと思え、天の恩寵が人の罪深さ
と争うゆえに。　（XI　三五五―六〇）

「善き事も悪しき事も共に聞くと思え」ということは創世記二・九、二・一七、三・五、三・二二という一貫した記事にもとづいてミルトンが考えた善悪の問題がからんでいるにちがいない。

ミルトンは九巻において「善悪を知る木の実をたべて善と悪の両方を知ったのであり、それは善を失って悪を知ったことを意味する（IX　一〇七〇―三）とアダムに言わせている。このことはミルトンにとって重大なことであり、そのことが十一巻にも神自身のことばとしてでてくる。

ああ子らよ、我らの一人の如く人はなり
あの禁じられし木の実を彼が味わいてより
善と悪を知る、されど彼に誇らしめよ
失われし善と獲得せし悪との知識を。
もし彼が善そのものを知ることに満足し
悪を知ること全くなければよかりしものを
（XI　八四―九）

このように読んでいくと十一巻、十二巻を大きく貫いている部分が見えてくるように思われる。すなわち、ミカエルがアダムに見るに耐え難いものを見せようとしていることは悪の力が善の力を著しく圧迫している故に、悪の力が圧倒的に猛威を振るっている子孫の歴史の姿なのである。それは旧・新約聖書にもとづく歴史記事であり、ミカエルがそれを幻において見せようとするのであるが、その前にアダムのへびにだまされて「くもらされた眼」を手当して眼の神経を浄める（XI　四一〇―六）。

ミルトンはこれから語ろうとすることがアダムに示す神の啓示のごとき重大なものであることを示したかったのであろう。手当をうけたアダムは人事不省におちいる（XI　四一七―二〇）。それはヨハネ黙示録の記事を思いおこさせる。

わたしは彼をみたとき、その足もとに倒れて死人のようになった。　（黙示録一・一七）

しかしこの詩の前後はダニエル書を思いおこさせるのである。

われダニエルはこの幻を見て、その意味を知ろうと求めていた時、見よ、人のように見える者が、われの前に立った、わたしはウライ川の両岸の間から人の声が出て、呼ばわるのを聞いた、「ガブリエルよ、この幻をこの人に悟らせよ」。すると彼はわたしの立っている所にきた。彼がきたとき、わたしは恐れて、ひれ伏した。しかし、彼はわたしに言った。「人の子よ、悟りなさい。この幻は終りの時にかかわるものです」。彼がわたしに語っていた時、わたしは地にひれ伏して、深い眠りに陥ったが、彼はわたしに手を触れ、わたしを立たせて、言った、「見よ、わたしは憤りの終りの時におこるべきことを、あなたに知らせよう……

（ダニエル書八・一五―九）(7)

ミルトンがアダムに幻をみせる前にしばらく意識不明にさせたということは聖書の黙示文学のパタンにならったといえるかもしれない。それは聖なるものへの畏敬を示す。

ミカエルは「アダムよ目をあけるのだ」（XI　四二三）といって目をさまさせる。そのあとにつづく記事は旧約聖書にしるされる記事が用いられてできている。われわれ読者から見ると旧約聖書の歴史的記事のいくつかを黙示録の記事のように未来のこととして、又畏敬すべき預言として受取ることはない。だから、ミカエルがそれをアダムに示そうとする前にそれを何か聖なるものとしてアダムに受取らせようとするのだと理解することは困難かもしれない。しかしアダムという人類の親にとってはそれが聖なる畏敬すべき預言になることをミルトンは意識していたのではあるまいか。

ミカエルは重々しく告げる。

アダムよ汝の眼をあけよ、まずみよ
汝のはじめの罪がもたらせし結果を、
汝から起こりて人々に。されど彼ら今まで
禁断の木にふれもせず、へびと共謀もせず
汝の罪を犯さず。しかもその罪より得しは
更にはげしき振舞をもたらす腐敗なり。

（XI　四二三―八）

ミカエルはただアダムに意識を回復させたのではなく、アダムに子孫の苦しみの責任があることをわからせるようにしているのである。そして一番最初に創世記のカインとアベルの物語を幻にして見せるのである。これに於て、アダムははじめて肉体の死を目撃するのである。アダムはこれを見て叫ぶ。

ああ師よ、何か大いなる誤りが降りたり
かの優しき人に、よく犠牲を献げしに、
敬虔が、又純なる献身がかく報われるか。
（XI　四五〇―二）[8]

これをはじめとしてミカエルは次々にアダムの眼前に人人の未来の死を見せていく。暴力による死、不節制による死、病気による死など。しかも病人の悲惨な苦しみの呻き声をきかせる。ミカエルは老齢による死をも見せる。[9] アダムは答える。

今よりのちわれ死をにげず、又生を
多く伸ばさず。むしろいかに果てんかを願う
いと美しく易くこの重き責任を逃れて。
されど命を捨てさる運命（さだめ）の日まで責任を
こらえて忍耐をもて待たねばならぬ
わが崩壊を。
（XI　五四七―五二）

次に幻が移り変り、カインの天幕から示される快楽にみちた女たちの光景とそれがもつ誘惑の力が映る。それが敬虔な生き方をしていた男たちをだらくさせる。ここはカインの子孫の天幕すなわち「悪の天幕」（XI　五六七―八）で神のめぐみの豊かさと、それが人をだらくさせていくという人の悪とを示している。アダムもその多彩なたのしみを目に見て人間の生きる目標をそれは完全に示しているように思ったのである。ミカエルはアダムに毅然たる態度の必要を教える（XI　五五六―六三六）。

次にミカエルが見せる幻は「善き者と悪しき者」の結婚の結果生れた者たちの血に飢えた英雄主義の悪の姿である。しかしその中に毅然たる一人の男エノクが正と邪、正義、信仰、真理、平和及び神のさばきについて人々に語るが、群衆が彼を罵倒してしまう。しかし彼は雲に包まれて天に挙げられるという。もしそうでなかったら、狂暴なる

群衆によって捕えられたであろう。これを見てアダムは叫ぶ。

ああ何者なるかこれらは
死の手先にして人ならず、彼らかくの如く
非人間的に人に死を与えるとは……

（XI　六七五―七）

戦いが終わり平和が来たが、みにくいだらくがはじまっている。そこに一人の敬虔な老人が現れる。それはノアである。彼は所かまわず改心と悔改めを説く。しかし所詮それは無駄となり、創世記の記事をふまえた方舟物語が幻に見える。すなわち大洪水の結果人類の滅亡に近い結果となるのである。ミルトンは自らアダムに声をかける如く次のように言う。

さればいかに汝悲しみしかアダムよ、
汝の子孫すべての終りを見て、悲しき終り、
人の消滅、汝にはこれまた洪水が、
即ち涙と悲しみの洪水が汝を圧倒せり
又汝の子孫のごとく汝を沈ませり、遂に
天使に支えられて汝は己が足にて立てり
慰めもなく。それ一人の父親が嘆くごとし
その子らが見渡す限り一度に絶滅せりとて。

（XI　七五四―六一）

アダムは人類の親としての責任の重さにうめくが大洪水によって殆ど人類が死滅した幻を見て残るノアの家族も耐えがたき環境の中で飢えと苦痛の為に息絶えるだろうといって自分の責任もそれまでであると思いはじめる（XI　七六三―八六）。しかしこの正しい人ノアの家族が乾いた地面に降りたつことができ、空に虹がかかり、神の平和と契約のしるしを見るのである。

むすび

ミカエルに「善き事も悪しき事も共に聞くと思え」といわれたアダムは見るに耐えない未来を見せられつづけた。自分の子孫は、「生めよ殖えよ」（VII　五三一）といわれて祝福される存在であったが、それが呪わしい子孫の未来を意

味することに変わり、罪が満ちて死が地上を支配し、「死」の胃を満たしていくのをミルトンは読者に示したのである。[10] ここで読者はそれがサタンの勝利であることを意味することを知る筈である。善が失われ悪が満ち、神のことばを語ろうとする人が現れても全く絶望的であった。それがアダムの罪の結果であって、アダムはそれを目をそらさずに見せられてきたのである。

サタンの名代として（X　四〇三）の「罪」と「死」が *Paradise Lost* においていかに重要な役割をもっているかを誰も否定できないであろう。しかしミルトンは罪と死をアレゴリーでしか語らなかったわけではない。アダムとエバという人間サイドでのみ罪と死を考えるならばあるいはアレゴリーは不要であるかもしれない。しかし神の大義から罪と死をミルトンが語らざるをえない時、人間の罪についていえば「罪」という個々の罪を越える根源的な罪が存在し、又人間の死についていえば「死」という肉体的な死を越える根源的な死があることをミルトンは読者に理解するよう求めているようである。

その「罪」と「死」が *Paradise Lost* 二巻にはじめて現れ、十、十一巻で活躍するが、その存在は、罪も死もごく自然なる人間の一部ではなくて、最も不快なる、異常にして謎めいた不自然なる存在であることを意味しているのである。すなわち人間は異常なる超自然的な必然に打ち勝つ力を持たずに滅びるより他ない（その滅びはアダムが一旦神にそむいてしまった結果なのであり、その責任をアダムが負わなければならなくなったのである）。しかしそれ故にこそ人間には神の恩寵が人の上に働くべく用意されていることが暗示されて十一巻は終っているのである。

注

(1) Albert S. Cook (ed.), *Addison Criticism on Paradise Lost*, Phaeton Press, 1968. p. 136.

(2) 例えば、創世記四・七、イザヤ五九・二、エレミヤ五・二五、第一コリント一五・五五（ホセア一三・一四）、黙示六・八など。

(3) Steadman, *Milton and Renaissance Hero*, Oxford at the Clarendon Press, 1967, p. 193.
Steadman はミルトンが英雄詩を霊化することによって叙事詩のコペルニクス的転回をしているという。

(4) *A Milton Encyclopedia*, Vol. 7, p. 974.

(5) cf. Ⅲ　一七三―四。

(6) *A Milton Encyclopedia*, Vol. 5, pp. 192-3. ルネサンスの人は異象が神の怒りをあらわすと考えた。

(7) 日本聖書協会、一九五五年訳版。ダニエル書一〇・九にも「深い眠り」が記されている。

(8) Fowler は *The Poems of Milton*, Longman, 1968 の注においてアダムが神のさばきに不信をいだいたことは誤りであるという。いいかえれば、アダムが自らの責任の自覚が足りないことを示している（XI 五四七—五二においても、又XI 六七五—七においても、又XI 七六三—八六においてもその自覚は不充分である）。

(9) まだ人の死を現実に見たことのないアダムにとっていかなる人の死も異様で不快な特別な事件と見える筈である。ミルトンがもっともおだやかな死をも示したのは、すべての人に死がのがれられないこと、そうして決して例外的な事件としておこるものではないこと、そしてこの世界がこの不自然な死のリアリティにみちていることをミルトンが読者に理解することを求めていると思われる。

(10) 地上でみる限りサタンの勝利であるとみえるが、サタンが地獄に帰ってその勝利を報告するとき、自分も仲間の悪霊たちも突然呪われた蛇の姿に変身させられる（X 五〇四—八四）。

（本論文は、昭和六一年度成城大学特別研究助成『英米文化と日本』の研究成果として発表するものである。）